



アフリカ大陸のサハラ砂漠より南の地域は貧困だけでなく、教育機会に恵まれない、医療体制も不十分である。さらに安全な水の確保もままならず、感染症がまん延するなど、さまざまな課題が存在する。派遣されたベナンも例外ではない。

JICA  
だより



ベナン共和国  
中本千晶さん(31)  
呉市出身

活動拠点は、クワボ県ジャコトメ市にある保健センターである。ここは日本でいう診療所のような存在で、地域住民の健康を支える重要な拠点である。ベナンにはこの国発祥の宗教であるブドゥー教が

## 現代と伝統 医療共存を

広く根付いており、祈禱や薬草などを用いた伝統医療が今も日常生活の一部である。毎朝、抗菌作用があるレモングラスのハーブティをコーヒーと混ぜて飲むのが習慣で、感染症が多い



マラリアの予防について啓発活動をする筆者(奥右から3人目)

この国ではこうした自然療法は理にかなった側面もあると思う。ただし、マラリアのような感染症は進行が早い。放置すれば命に関わる危険があるため、現代医療による

とはいえ、軽症の病気や予防の段階では、伝統医療が安価で効果的かもしれない。住民にとって「どんな症状が出たら病院に行くべきか」の判断が難しいと思うから。ただお金がないため受診できず、かなり重症になってから来院する患者がいるのも事実である。重症になるにつれ治療費の負担が大きくなるため、これは悪循環である。地域者は特に小児の経済状況やアクセスが多く、病気の進行が早いと感じること。予防行動が大切だと思ふ。実際、ベナンでの5歳未満の死亡率はかなり高い。早期治療の大切さ、予防行動の必要性を広く周知することが肝要である。

現代医療と伝統医療が対立するのではなく、互いの良さを生かして共存できる形が実現することを願っている。それが、ここで暮らす人々の健康を守るための、現実的で持続可能な道ではないかと思ふからだ。